
龍魂 黒炎の龍と獄炎の獅子

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍魂 黒炎の龍と獄炎の獅子

【Nコード】

N4994U

【作者名】

sibugaki

【あらすじ】

リリカル銀魂Strikers 蒼炎の龍の前の話
修羅として生きることを決めたスバルが修羅世界でいかなる試練を越えて来たのか？そして、何故トウマが狂気に落ちてしまったのかそれを此処で話しておくことにする

注意…此処ではかなりグロイシーンやダークなシーンが多いです
苦手な人はご注意ください

すべての始まり（前書き）

スバルが何故修羅となったのか
何故トウマは狂気に落ちたのか
それを話すためにはまず事の始まりを話さねばならない

すべての始まり

全ての始まりは4年前であった。

新暦0071年4月29日

ミッドチルダ臨海第8空港

その日は何時も以上に人が込み合っていた。

大勢の人、人、人……である。

皆それぞれの目的地を目指して忙しく歩き回っている。

そんな中、一人の少女が駆け回っていた。

「うーん、此处じゃないみたい？ 一体何処行っただろう？」

少女は一人そう呟きながら空港内を歩き回っていた。

青い髪に緑の瞳をした11歳位の少女である。

「きつと近くに居るよね。よし！ 頑張って探すぞお！」

少女は手を高く振り上げて再び空港内を歩き回った。

だが、この時まだ少女は知らなかった。

自分自身に起こり得るであろう激動の人生を……

時刻は夕方過ぎ、その時にそれは起こった。

ミッドチルダ空港の大火災。

大勢の人々を取り残された中、管理局の魔道士達も懸命に救助活動を行っていた。

しかし火の勢いは止まらず消火は困難を極めていた。

「駄目だ！一旦引き上げよう！」

「まだ子供が中に居るんだぞ！」

消防隊が声を張り上げあう。

そんな大火災の中で、彼は居た。

「頼む！命だけは助けてくれ！」

「裏切り者の末路は貴様も知っていよう・・・覚悟！」

赤い髪をした少年は片手に覇気を纏いその裏切り者を処刑した。
残っていたのは裏切り者の残骸のみである。

処刑を終えた少年は覇気を抑えた。

そしてフツと息を吐く。

「これで使命は終わった・・・後は此処を離れるだけ・・・ん？」

人知れず離れようとした時であった。

少年の耳に微かな声が聞こえた。

それは少女の泣き声でもあった。

炎の燃え上がる音の中に微かだがそれは聞こえてきたのだ。

「まさか・・・こんな炎の中にか？」

少年は驚いた。

こんな炎の中生身の人間ではすぐに黒焦げになってしまう。

「・・・間に合うか？」

少年は舌打ち混じりに言い放った。

そして声のした場所へ向かう。

其処は広々とした空間であった。

其処には一人の少女が蹲り泣いていた。

靴は片方が脱げ落ちてしまったのか履いて居ない。

両手で顔についた煤を払いながらも滝の様に涙が溢れている。

そんな時であった。

少女の背後にあった石像が倒れてきたのだ。

少女はそれを見て動けなかった。

もう助からない。

もう家族にも会えない。

そんな思いが彼女の中を駆け巡っていたのだ。

だが、その時であった。

「空円脚！」

少年の掛け声と共に石像は粉々にされた。

粉末状になった石像の破片の中少年は少女の前に降り立つ。

「大丈夫か？」

振り返り、少年は少女を見た。

少女は涙目になりながらもその少年に縋りつく。

相当怖い思いをしてきたのだ。

そんな少女を少年は優しく頭を撫でていた。

「お・・・お兄さん・・・誰？」

ようやく落ち着きを取り戻した少女が少年に尋ねる。

「俺は・・・」

少年がそれに答えようとしたその時であった。

突如として近くの壁が崩壊したのだ。

嫌、吹き飛ばされたと言った方が正しい。

そして破壊された壁の向こうには一人の少年が立っていた。

少女を助けた少年とは打って変わってこちらは青い髪をした鋭い目つきの少年である。

「フォルカ！一体どうしたん・・・ん？」

少年が事情を聞こうとした時、目の前で少年に縋りつく少女を見た。明らかに自分達とは違う服装をした幼い少女である。

それを見た少年は更に鋭い目つきになって少年を睨む。

「フォルカ・・・貴様」

「フェルナンド！待ってくれ！」

フォルカと呼ばれた少年がフェルナンドと呼ぶ少年を止めに入る。

「退け！貴様修羅の掟を忘れたのか？」

「忘れるものか！『我等修羅が無名の内にはいかなる理由であろうと外界への接触を禁ずる。もし外界の人間に見られた場合はその場で抹殺せよ』その掟は覚えている」

「そうだ！そしてその娘は俺達を見た・・・殺すしかない」

フェルナンドはそう言っつて両の拳に力を込める。

拳から蒼い炎の様な気が溢れ出ているのが見える。

触れるだけで人を殺せそうな気が流れているのだ。

それを少女に向けて放とうとしている。

だが、それをフォルカが前に立ち遮る。

「何のつもりだ？退け！フォルカ！」

「退くつもりはない。この子はまだ子供だ！その子を殺す事は俺には出来ない！」

「修羅に女も子供もない！貴様が退かないのなら貴様ごと・・・」

フェルナンドが狙いを少女からフォルカに変える。

フォルカはそれに対し何もせず立っていた。

覚悟を決めたのだろう。

だが、そんなフォルカの前に少女が立つ。

「何の真似だ？」

「もう止めて！このお兄ちゃんを虐めないで！」

「き、君は・・・」

その行いにフェルナンドは勿論フォルカすら驚いた。

しかしフェルナンドは未だ変わらず険しい目線で少女を睨む。

「貴様・・・分かってるのか？俺はお前を殺すのだぞ？俺が恐ろしくないのか？」

「こ・・・怖いよ・・・でも、でもこのお兄ちゃんは私を助けてくれた！だから、だからこのお兄ちゃんを虐めないで！」

目を潤ませながらも必死に答える。

恐怖で胸が張り裂けそうなのだろう。

それでも必死に堪えてフォルカを助けようとしているのだ。

そんな少女の回りからはフォルカやフェルナンドと同じ物を感じ取れた。

まだ未熟だがそれは間違いなく『覇気』であった。

「こいつ・・・異世界の住人だと言うのにこれ程の覇気を・・・」

その覇気を見て二人が驚いていたその時であった。

「フォルカ！フェルナンド！一体どうしたと言うのだ？」

『アルティス兄さん！』

二人が視線を向けた其処には銀色の髪をした青年が立っていた。

長いマントを羽織っていると言うのにそのマントは炎に触れても燃える気配すら見せない。

それは彼の覇気が衣服を守っているからだ。

そして、そのアルティスと呼ばれた青年もまたスバルを見る。

そして二人を睨む。

「お前等、これは一体どういう事だ？」

「俺はこのガキを始末しようとしたんだ！だがそれをフォルカが遮

るんだ！」

「彼女はまだ幼いのです！それを俺達の勝手に殺す事などできません！」

フォルカはキツと鋭い目で進言する。

だが、アルティスの目は険しくフォルカを睨みつける。

「言い分は分かる。だが、此处で助けたとしても、いずれ修羅の刺客が現れ、その時には彼女のみならず、その家族や親族、友人に至るまで皆殺しになるのだぞ！どの道・・・お前はその子の未来を潰したのだ」

「う・・・」

反論の言葉が見つからなかった。

正にその通りなのだ。

あの時自分が彼女と出会ってなければ彼女は死ぬ事は無かったであろう。

フォルカは苦い顔をした。

だが、そんなアルティスの前にも少女は立つ。

まるで反論が出来ないフォルカを庇うかのように。

その時の彼女から放たれる未熟な覇気をアルティスも感じ取っていた。

「この娘・・・異世界の人間だと言うのにこれ程までの覇気を・・・」

アルティスもまた少女の覇気を感じ取り驚いた。

アルティスはゆっくりと少女の前に肩膝をつき目線を合わせた。

「娘よ、名は何と言う？」

「私は、スバル・・・スバル・ナカジマって言います」

少女、スバルは自身の名を言った。

それを聞いたアルティスは立ち上がる。

「スバルよ、今からお前に二つの選択肢を与える。一つはこのまま救助されるのを待ち、それ以降修羅の刺客に命を狙われる日々を送る事・・・そしてもう一つは、我等と同じ『修羅』になる事だ」
『な!』

アルティスの示した道にフォルカとフェルナンドは驚いた。

「に、兄さん!それは本当なのですか?」

「こんな子供に修羅などなれるはずがない!」

「貴様等とてかつてはそうであっただろう。それに、それを選ぶのは我等ではなく、スバルだ」

そう言って二人を黙らせアルティスはスバルを見る。

スバルは只黙って俯いていた。

「時間は余り無い。手早くして貰いたい」

これ以上時間が掛かれば他の人間に見つかってしまう。

そうなれば今度こそ殺さねばならない。

余り猶予は無かった。

そんな時、スバルは決心した顔でアルティスを見上げた。

その答えは・・・

「私は・・・なります!お兄ちゃんと同じ、修羅になります!」

決意した目でそう告げた。

それを聞いたアルティスは納得したのか深く頷く。

「ならば、スバルよ。お前の中からこの世界の記憶を消させて貰う」

「え？ど、どうして？どうしてそんな事をするの？」

「修羅の世界に置いて過去の記憶は足枷にしなければならない。あればお前の命を奪う危険性がある。故の処置なのだ」

そう言ってアルティスが両手に覇気を込めてゆつくりとスバルの頭に近づける。

「待ってくれ兄さん！その役目は俺がやる」

「フォルカ・・・分かった」

アルティスは下がり、変わりにフォルカがスバルの前に立つ。

「お・・・兄ちゃん」

「スバル、お前の人生を奪ったのは俺だ・・・恨むのなら恨め！殺したいのなら俺を殺すが良い。それが・・・お前の選んだ道なら俺は喜んでこの命を捧げよう。だが、今は・・・コレだけは言わせてくれ・・・すまん」

一言謝罪し、そしてスバルの中に自身の覇気を送り込んだ。

その直後激しいスパークがスバルの脳内を駆け巡った。

その衝撃にスバルの意識は飛び、そのまま倒れそうになる。

それをフォルカがそっと抱き上げる。

眠ったかの様にスバルは動かないでいた。

「これで良い・・・さあ、我等も此処を離れるぞ。これ以上居てはこの世界の住人に見つかってしまう」

「ああ、行くぞフォルカ！」

「・・・ああ」

三人はそう言い会って霧の如く其処から姿を消した。

火災のあった現場には只一つ、スバルの履いていたであろう靴の片方だけが無造作に転げ落ちていただけであった。

すべての始まり（後書き）

いやあ、今回はかなりダークな話になっちゃいますねえ

銀時

「俺って出るの？」

多分出ない。此処では修羅がメインだから

銀時

「ひでえ・・・」

主要人物紹介（前書き）

簡単に紹介しておきます

主要人物紹介

キャラクター紹介

○ 内の年齢は『蒼炎の龍』時の年齢です

スバル・ナカジマ 11歳（15歳）

ミッドチルダ出身の少女。

空港の大火災の際にフォルカに命を救われたが同時にその為にミッドで生きる事が出来なくなり修羅となった。

その際にミッドに居た記憶の殆どを奪われ白紙の状態で修羅世界に訪れた。

以前の優しく涙もろい性格から一変して殺意と狂気に満ちた性格になっている。

それでもかつての優しさの片鱗は残してあるらしく時として命を奪う事に躊躇いを感じる。

だが、その優しさは彼女に数多くの試練を与える結果となる。

今回の話では彼女が修羅世界で送ってきた4年間について書き記すつもりである。

トウマ・アズマ 12歳（16歳）

スバルと同門の修羅。

この時のトウマはまだ狂気に支配されておらず何処か人を食ったような優しさを持った修羅であった。

スバルに対し彼だけは優しく接し共に切磋琢磨し腕を磨きあった。彼が居なければ今のスバルは居なかった筈である。

そのトウマが何故狂気に落ちたのか・・・それは後に語る事にする。

スバルとトウマの・・・悲しき物語を・・・

フォルカ・アルバーク 15歳（19歳）

修羅世界の修羅。

修羅将軍になれる力を持つてはいるがそのやさしさ、甘さ故に将軍になれずに居る。

修羅世界の流派『機神拳』の使い手でありその腕前は『超級』の強さを持つ。

礼儀正しく文武を重んじる。

しかし敵に対しては容赦せず例え格下であったとしても挑んで来た場合は全力で叩き潰す。

スバルを修羅世界に誘ってしまった事に罪悪感を感じており彼女を守ろうと影から見守っている。

そして、もし彼女が望むのならこの命を差し出す覚悟もフォルカにはある。

スバルにとっては肉親の居ない世界で唯一の肉親に近い存在でもある。

スバルの命の恩人でもあり、また恩師に当たる人物でもあるのだ。

主要人物紹介（後書き）

次回から修羅世界での試練が始まります

修羅世界（前書き）

修羅の世界は弱肉強食が掟
弱者は食われ、強者が食らう
そんな世界でスバルは生きていくことになる
これはその最初のお話

修羅世界

スバルが目を覚ましたとき、其処は果てしない森が広がっている丘の上であつた。

目を擦りながら起き上がる。

回りには同じように集められた同じ年の子供達が集まっている。

何故皆この様な場所へ集められたのだろうか。

スバルは思い出そうとした。

だが・・・

「あれ？思い出せない・・・何で？」

幾ら思い出そうとしてもスバルの中はまるで空っぽであるかの様に何もないのだ。

彼女の中の記憶が一切ない。

そういえているのだ。

「何で？どうして？・・・此処は何処なの？私は・・・誰なの？」

辺りを見回しながらスバルは呟いた。

何故此処に来たかどころか、自身の名前すら思い出せないのだ。

徐々に不安になっていく。

スバルの瞳からうっすらと涙が溢れ出ていた。

回りを見回すと皆同じであつた。

不安と孤独感から涙を流す者も数名は居る。

しかし泣く者が殆どではない。

中にはキツとした表情で前を見据えている者も居る。

すると、其処に数人の青年がやってきた。

「ほおう、今度の若人は中々の顔ぶれだなあ」

「はい、中には異世界から来た者も居ます。修羅王」

銀色の長い髪をした青年。アルティスの横に立つ黒い鎧を着た中年の男が目を大きく見開いて子供達を見た。
そして、その視線がスバルに止まる。

「ひっ！」

修羅王の突き刺すような目線を見てしまい怯え出すスバル。

そんなスバルの顔をグッと引き寄せる修羅王。

そしてマジマジとスバルの顔を観察した。

「フッ、良い面構えだ。それに中々の覇気を持っている。生きてこれたときが楽しみだ」

そう言って乱暴にスバルを離す。

スバルは混乱していた。

覇気？生き残る？一体何を言っているのかさっぱりであった。

すると、修羅王を筆頭に男達は数歩下がる。

此処は断崖絶壁であり、下には深い森が広がっている。

落ちれば最悪命はない。

そんな中、修羅王は子供達に宣言した。

「今より1年の時、うぬらはこの森で生きながらえろ！もし生き残れたら、その者を修羅と認め、名前を授ける！うぬらに修羅の道しるべがあらんことを！」

そう言って拳を天に掲げると、それを一気に地面に叩きつけた。

すると、叩きつけた拳を中心に横一文字に亀裂が走り、スバル他子

供達の居た断崖絶壁はそのまま森に向かってまっさかさまに落ちていったのだ。

「きゃあああああああああああああああ！！！」

スバルは大声で叫んだ。

他の子供達も悲鳴を上げる。

だが、泣こうが喚こうが助けが来る筈などない。

それが修羅の世界なのだ。

やがて、スバル達の姿は深い森の中に消えていった。

それを見届けた修羅王は満足気な顔をして腕を組んでいた。

「フフッ、次の年が楽しみだな・・・帰るぞ」

修羅王が踵を返す。

それを見て他の修羅達も同様に帰って行く。

只一人、其処に佇んでいる青年が居た。

フォルカである。

「心配か？フォルカ」

「アルティス兄さん・・・」

アルティスがそっとフォルカの肩に触れる。

それを感じたフォルカがそっと振り返った。

そして頷く。

「俺は・・・スバルに地獄の道へ誘ってしまったのかもしれない」

「今更何を言う。全てはスバルの選んだ道なのだ。それに、あそこで選ばなければ、我等はスバルを殺す事になったのだ。今はそう割り切るしかあるまい」

「兄さん・・・スバルを・・・スバルを助ける事は出来ないの
ようか？」

フォルカがアルティスに進言した。

だが、その進言をアルティスは却下した。

「それは駄目だ。これはいわば修羅の試練の様な物。これを一人で
乗り切れない者に修羅となる資格はない。もしこの場で死ぬよう
ならいつそ今殺してやった方が親切と言う物なのだ」

「・・・」

「辛いかわフォルカ？だが、これもまたお前に課せられた試練なのだ。
見事それを取り切って見せろ」

「・・・はい」

アルティスの言葉にフォルカは静かに頷いた。
そして踵を返していく。

（スバル・・・無事で・・・無事でいてくれ）

フォルカは去りながら内心そう願うのであった。

「うう・・・いたた・・・」

目を覚ますと其処は一面森であった。
まるでジャングルである。

そんな森の中スバルは起き上がった。
体を見るが特に外傷はない。

どうやら木々がクツシヨンの役割を果たしてくれたのだろう。
ホッとするスバル。

だが、その隣では、一人の少年が瓦礫の下敷きになって動けないでいた。

「うう・・・痛い・・・痛いよお！」

涙を滲ませながら少年が泣く。
それを見たスバルが近づく。

「だ、大丈夫？」

「痛いよ・・・助けてよ・・・動けないよお！」

涙を流してスバルに助けを求める。

スバルは少年の足を挟んでいた瓦礫を必死にどかそうと試みる。

だが、所詮子供の力では瓦礫を動かす事など出来ず無駄な時間が過ぎていくだけであった。

そんな時であった。

こちらに何かが迫ってくるのを感じた。

一つ、嫌違う！複数が迫ってきている。

それも人間の足音じゃない。

獣の足音なのだ。

それが一斉にこちらに迫ってきているのだ。

「こ・・・こっちに来る」

「早く、早く助けてくれ！」

少年が更に泣き喚く。

スバルは少年の手を掴んで必死に引っ張った。

だが、それでも少年の体はビクともしない。

全く無駄なのだ。

その間にもドンドン足音は近づいてきている。

スバルの中で徐々に恐怖が芽生えてきていた。

このままこの少年と共に居ては自分も殺される。

近づいているのは正しく自分達に『死』を告げる遣い達なのだ。

このまま此処に居てはこの少年と共に殺される。

出来れば助きたい。

だが、今のスバルでは少年を助ける事が出来ない。

どうする？ どうすれば良い？

苦しい葛藤を迫られるスバル。

そして、彼女の選んだ道・・・それは。

「大丈夫！絶対、絶対に守って見せるから！」

手近にあった太い木の枝を手に取り死の遣いと戦う決心をするスバル。

だが、手元が震えているのが分かる。

怖いのだ。

幼いスバルの体から奮えが取れることはない。

そして、そんなスバルの目の前に死の遣いはやってきた。

数は4体。

白亜紀の時代に居たであろう恐竜『ヴェロキラプトル』を連想させる姿であった。

だが、その両腕の鉤爪は更に大きく鋭い。

まるで獲物を切り裂いて食するのに適した感じである。

それが一斉にスバルと少年を睨んでいたのだ。
獣達の目線がスバルを捕らえる。

彼等からしてみればスバルや少年は只の餌でしかないのだ。
その目で睨まれたスバルは一瞬奮えてしまった。

だが、すぐに顔を強張らせる。
そして。

「い……いやあああああああ！」

思い切り木の枝を振り上げて獣に襲い掛かった。

しかしその一撃が獣に当たる事は無かった。

木の枝ごと獣の尻尾の一撃がスバルを吹き飛ばしたのだ。

「きゃあああああ！」

威力が強すぎたのかかなり遠くへ吹き飛ばされるスバル。

獣達は見失ったスバルを探そうとはせずに、動けない少年の方に視線を移した。

「ひっ！……来るな！来るなあああああ！」

少年が両腕を必死に振るって抵抗する。

だが、それも空しい抵抗であった。

獣達は鋭い鉤爪を振るい少年の腕を切り裂き、首を切り落とし、内臓を引きずり出した。

少年の断末魔の悲鳴が響き渡る。

しかしそれを聞いて駆けつける者など居ない。

獣達は少年の肉を、血を、骨を全て胃の中に収めてしまった。
後には残骸しか残って居ない。

そして、其処には死と血の匂いで満たされていたのだ。

だが、これはスバルにとって不幸中の幸いでもあった。

もしこのまま獣達と戦っていたらスバルは間違はなく少年と同じ道を辿っていたであろう。

だが、スバルに・・・彼女に迫る地獄はまだ始まったばかりなのだ。そう、彼女にとって修羅の・・・殺人鬼としての道はまだ始まったばかりなのだ。

修羅世界（後書き）

・・・グロイ！グロすぎる！

銀時

「自分で書いてて言うなよ！」

だけどこれは流石にグロかったな

銀時

「でもこっから先もって大変なのが待ってるんだろう？」

うん・・・頑張る

銀時

「おう、頑張れ！」

飢餓（前書き）

生きる上で大事な事・・・

それは『食べる』事

だが、この世界で人間は『食べられる』側なのだ

飢餓

目を覚ましたスバルが見た物・・・それは、先ほどまで息のあった筈の少年の亡骸であった。

嫌、それは最早亡骸とも呼べない代物と化していた。
残骸・・・そう呼んだ方がしっくり来る形である。

今日の前にあるのは獣に食い荒らされ残骸と化した肉片が其処に転がっていたのだ。

それを見た途端、スバルは恐怖した。

一歩間違えれば次にこの姿になっているのは自分なのだ。
すると、辺りから獣の鳴き声が聞こえてきた。

周囲から多種多様な声が響く。

あたかも、『獲物を見つけた』と叫んでいるようにも聞こえた。

空腹の腹を満たす為に、獣達は獲物を追い求めて彷徨う。

そして見つけた獲物を見て吠えるのだ。

まさか、次に狙われているのは自分なのは・・・

「に・・・逃げないと！」

咄嗟に、殆ど本能的にスバルは動いた。

場所なんて分からない。

只、獣の声から逃げたかった。

必死に草むらを掻き分けて逃げ惑う。

それでも尚獣達の声は止む事がない。

辺りから声が響くのだ。

スバルは走った。

走り続けた。

今彼女を突き動かしているのは生きる執念と、そして恐怖であった。

どれだけ走っただろうか。

既にフラフラな足取りになったスバルが目も虚ろなまま辺りを見回していた。

既に空は暗く、月の光が辺りを照らしている。

それから察するに丸半日は走り続けた事になる。

既にスバルの体は疲労と空腹でまともに走れない状態であった。

だが、此処で倒れれば獣に見つかり食い殺されてしまう。

何処かに身を潜められる場所が無いか辺りを見回した。

すると、すぐ目の前にお詔え向きな空洞が見えた。

大ききからして小柄な子供位なら入れそうな大ききさだ。

「此処なら・・・寝られる・・・かなあ・・・」

既にフラフラになり、まともな思考など持ち合わせていないスバルは藁にも縋る思いでその空洞の中に入った。

中はお世辞にも寝やすいとは言い難い状況でもある。

だが、少なくとも外で獣の恐怖に怯えながら過ごす事は無いらしく、スバルはその空洞の中で猛烈な睡魔に襲われた。

翌朝、スバルを突き動かしたのは猛烈な飢餓感であった。

丸半年走り回った上、まだ何も口にしてないのだ。

あの空洞の中で過ごしていれば獣に襲われる心配はないのだがあの中は狭い上に食べ物が生じていない。

あのままあそこに居ては餓死するのを待つだけである。

その為勇気を振り絞って外に出て来たのだ。

「はぁ・・・お腹空いたなぁ・・・」

仕切りに鳴り響く腹に手を添えてスバルが呟いた。

今にも倒れそうな位だ。

とにかく何かを見つけて食べたい。

そしてこの空腹を癒したい。

そう思えたのだ。

しかし、歩いても歩いても見つかるのは実のなっていない葉ばかりである。

その上周囲からは未だに獣の鳴き声が響き渡る。

そして、時々響き渡る人間の悲鳴。

恐らく何処かで獣の犠牲になったのだ。

人間の悲鳴が響く度にスバルの肩がビクッと震えた。

次にこの悲鳴を上げるのはもしかしたら自分なのかもしれない。

そんな思いがスバルにとってつもない不安を募らせたのだ。

「怖い・・・怖いよ・・・」

空腹と恐怖に戦いながらスバルは必死に歩いた。

泣きたい・・・大声で泣きたかった。

だが、その泣き声を察知して獣達が押し寄せてくるかも知れない。スバルはそう思いグツと泣くのを堪えた。

すると、どうだろうか。

目の前にはまるでイチゴの様な実になっている木を見つけたのだ。しかも大きさがかなりある。

多分スバルと同じ位の大きさがあるのだ。

「うわぁ・・・大きい」

それを見たスバルの目が輝いた。

あれだけの大きさならきつと空腹を癒せる筈なのだ。

そう思うとスバルの足が自然とその木の実に向って動き出した。

気付いていないのだが、スバルの口からは滝の様に涎が垂れている。その様が彼女が今まで何も口にせずにごろごろしていた事を安易に想像させられた。

そして、ゆっくりと実に近づこうとした時であった。

「退け！」

「きゃぁ！」

何時から来たのだろうか。

別の少年がスバルを押しつける。

力のなかったスバルはそのまま押された方向に倒れる。

そして押し倒した少年を見る。

少年もまた飢えていた。

頬は凹んでおり、顔色も悪い。

明らかに此処数日何も食べていない顔である。

「な、何するの？」

「これは俺の物だ！お前はすっこんでろ！」

「そ、そんな・・・私だってお腹空いてるんだよ！私にも食べさせてよ！」

「ふざけんな！この実は俺だけの物だ！お前は来るな！来たらお前も食っちまうぞ！」

そう言つて少年は持っていた鋭利な石で出来た刀をスバルに向ける。

恐らく自身の手で作ったのだろう。

そんな物があつてはスバルには対抗出来ない。

第一、今のスバルはまともに歩く事も出来ないのだ。

已む無く諦める事にしたスバル。

そんなスバルの目の前で少年は木の実を掴む。

そして思い切り齧り付こうとした……正にその時であった。

ガバ
アツ
！

地面からそんな音が響いた。

かと思うと、先ほどの少年の下半身を巨大な植物の化け物が丸呑みにしていたのだ。

そして腰辺りにはその植物の牙が突き刺さり血が噴出していた。

「ぎゃあああああああ！痛い！痛いいいい
いいいいいい！」

少年が泣き叫びながら石の刃物を突き刺す。

だが、植物の口は硬くその程度では全く傷つかない。

それどころか徐々に少年の体がその植物に飲み込まれていく。

「痛い！痛い痛い痛いいいいいいいい！助け・
助けてえええええええええ！」

やがて少年からは悲痛の声しか聞こえなくなった。

そんな少年の事などお構いなしに植物の怪物は徐々に少年を腰から胸、胸から首にと飲み込んでいく。

そしてやがて少年は植物に飲み込まれてしまった。

全てを飲み込んだ植物の口が歪に動く。

恐らく中で少年をグチャグチャに咀嚼しているのだ。

スバルはその光景を只見ている事しか出来なかった。

自分とそれ程変わらない年の少年が今、目の前で怪物に食べられてしまったのだ。

その光景にすっかり恐怖してしまったスバルは全く動く事が出来なかった。

やがて、食事を終えた植物は元の地面に潜ってしまった。

「あ・・・ああ・・・あああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

その直後、スバルは大声で泣き叫んだ。

叫ばずには居られなかったのだ。

目の前で、目の前で少年が食い殺されたのだ。

しかも、もしあの時少年が木の実を横取りしなかったら、その時は自分がその実の持ち主の餌食となっていたのだから。

尚更スバルは泣き叫んだ。

少年の食い殺される現場を目撃した瞬間、彼女の中にあつた恐怖が一気に噴出したのだ。

それが爆発し、スバルは声一杯に泣き叫んだのだ。

だが、それが災いしてしまったのだ。

気がついたらスバルは獣の下敷きになっていた。

目の前からは爬虫類特有の生臭い匂いと血の様な匂いがしてきたのだ。

スバルはゆつくりとトカゲの上から逃げる。

するとその目の前では先ほどスバルに襲い掛かって来た獣が事切れていたのであった。

「ど・・・どうして?・・・あ!」

見ると獣の心臓辺りには先ほど少年が持っていた石の刃物が突き刺さっていたのだ。

どうやらあの時少年はその石の刃物を手放してしまっていたようだ。だが、これのお陰でスバルは獣から身を守ったのだ。

それだけではなく、目の前には念願の食べ物が出来たのだ。

トカゲの肉。

それを察知した途端スバルの体が動いた。

そして、形振り構わずトカゲの体に歯を突き立てる。

「あが・・・あがが!」

必死にその肉を食らおうともがく。

だが、トカゲの鱗は硬く歯が全く通らない。

疑問に思ったスバルだが、今度は胸に突き刺さっていた石の刃物を使い更に傷口を押し開いた。

中から鮮血が飛び散りスバルの顔や服に付着する。

だが、そんな事お構いなしにスバルは傷口から見える肉に思い切り齧り付いた。

調理など必要ない。

味など関係ない。

只、只空腹を満たしたい。

そんな思いだけがスバルの中にあっただ。
その時のスバルの姿は・・・正しく『獣』と言える姿であった。

飢餓（後書き）

またグロイ展開になってしまった

銀時

「なあ・・・この展開あとドンくらい続くんのだ？」

多分暫く続くと思う。何しろ1年間生き残らなくちゃならないし

銀時

「とことん容赦ないなあ作者」

まあね

地獄の終り・・・そして始まり（前書き）

今回で遂に1年経ちます

そしてそれはスバルの修羅への第一歩となります

地獄の終り・・・そして始まり

時が経つのは早い物である。

目の前には一面深い森が見える。

その森からはただただ「死」の気迫だけが漂ってきていた。

その森こそが幼い若人が修羅になる為の第一の試練である。

あの森で幼い若人達は一年の間生き抜き晴れて修羅となれるのだ。

その森を見下ろせる位置にある崖の上に一人の青年が座っていた。

赤い髪が風に揺られて自然に靡いていく。

青年の顔にはうつすらと無精髭が生えておりその顔色はすっかりやつれた形であった。

それでも青年の瞳はしっかりと目の前にある死の森を見据えていた。まるで何かを待っているかのように。

「フォルカ」

後ろから声が聞こえた。

呼ばれたフォルカはそのまま上半身だけ振り返る。

其処には銀色の長い髪をした青年が居た。

その青年の手には体長約40cm程の爬虫類の生き物が握られていた。

首筋からはトドメとも言える一撃の跡がついており其処から血が滴り流れている。

流れ出た血は爬虫類の顔を伝いそのまま地面に落ちて大地を赤く彩っていく。

青年はズイと爬虫類の亡骸をフォルカに差し出した。

「飯だ。食え」

青年はそう言ってフォルカに爬虫類の亡骸を差し出す。

だが、フォルカは食べる気になれなかった。

今のフォルカの中にあるのは只一つの感情であった。

それは罪悪感であった。

自身の罪を悔いていたのだ。

何故フォルカが悔いるのか。

それはあそこに佇む死の森に関係があった、

あの森にフォルカは一年前一人の少女を放ってしまったのだ。

それはかつてフォルカが異界で任務に赴いた際に出会い、救ってしまった幼い少女であった。

修羅の世界には掟がある。

それは、異界の者とは接触してはならない事である。

もし接触した場合その者を殺さねばならないのだ。

修羅は門外不出の種族である。

戦いのみを生き甲斐とし常に戦いで己を鍛え上げていく種族である。

だが、異世界への進攻は一切しない。

それが彼等修羅の掟でもあった。

故に彼等は異界との接触を断っているのだ。

それをフォルカは犯してしまったのだ。

幼い少女の命を救う為にフォルカは彼女に顔を見られてしまったのだ。

本来ならその場でその娘を殺すのが当然である。

だが、フォルカにはそれが出来なかった。

だが、このままではどの道少女は修羅の刺客により殺されるのは必定である。

それを回避する唯一の方法が、彼女を修羅にする事であった。

「辛いのは分かる。だが、それで前が死んだらどうする？」

青年の顔が何時になく険しくなる。

爬虫類の尻尾を握っていない空いている手を硬く握り締めてフォルカの前にその握り締めた拳を見せる。

その拳をフォルカは見ていた。

青年の拳が震えている。

それからかなりの力が込められているのが安易に予想できた。

ポタリ・・・

青年の拳から赤い雫が滴り落ちた。

握り締めた拳に爪が食い込み肉を貫いたのだ。

それでも青年は拳を握るのをやめない。

ずっと硬く握り締めたままフォルカの前に立っているのだ。

「お前が死んだら、その時は本当にあの娘。スバルは一人ぼっちになるのだぞ？それはこの世界では死を意味する。お前は自分で救った幼い命を自らの手で摘み取るつもりか？」

青年が言う。

その言葉にフォルカは反論する事が出来ず、只首を横に振るだけであつた。

既にフォルカは1ヶ月以上何も口にしていない。

嫌、フォルカはあの時からずっと此処に座りっぱなしであつたのだ。

只、スバルの無事を祈るかのようにずっと座っていたのだ。

今もあの森の中でスバルは飢えと死の恐怖と戦っているのだ。

凶暴な獣と死闘を繰り広げ、その肉を食らい、今日一日を必死に生き抜く。

これは若者が修羅になる為に必ず通る道である。

フォルカや青年も経験した道である。

故にフォルカは止める事が出来なかった。

この試練を通過しなければ修羅になれないのだ。

修羅になる為には一年の間あの森で生き抜き此処に戻ってこなければならぬのだ。

それまでフォルカは死ぬ訳にはいかない。

自分で救った命を自分の手で摘み取るなんて最高に馬鹿らしい。

そう思えたフォルカは青年から爬虫類を受け取ると主室にその腹に齧り付いた。

爬虫類の薄い皮ごと肉に歯が食い込みそれを引き千切り咀嚼する。

千切られた部分からは血が溢れ出る。

赤い血がポタポタと流れ落ちて地面を濡らす。

その血をフォルカは啜り喉の渴きを潤した。

そしてまた食べる。

肉も、皮も、内臓すらもフォルカの口の中へと消えていく。

やがて爬虫類は骨だけの存在となった。

残骸をすぐ側に放り捨ててフォルカは口元を乱暴に拭う。

顔には僅かだが生気が戻っていた。

「フォルカよ。スバルの為にもお前は死ぬ訳にはいかないのだ。奴が帰ってくるその日まで待ち続ける事。それもまた貴様の修練でもある」

青年がフォルカの肩に手を置いて静かに語った。

それにフォルカは力なく頷く。

「義兄さん・・・俺のやった事は本当に正しかったのだろうか？」

フォルカが力なくそっと呟いた。

「どう言う事だ？」

フォルカの言葉に青年は尋ねる。

フォルカは森を見ながら会話を続けた。

「あの時俺は咄嗟にスバルを救う為には言えアイツを元の世界では生きられない様にしてしまった。もしかしたらあの時他の誰かが助けに来たのかもしれない。それを俺が介入した為にアイツの人生を狂わせてしまったのかもしれない」

フォルカが自身の胸中を語る。

それこそがフォルカの罪悪感である。

本当なら今頃スバルは年頃の少女である。

友達と学校で学問を学び平和な人生を送れたのかもしれない。

それを自分が助けたために何時死ぬかも分からない世界に導いてしまった。

此処は正に死の世界である。

力の無い物は力のある物に食われる弱肉強食の世界。

生き残る為には強くならなければならない。

泣き言や弱音はそのまま死に直結する。

そんな世界にあのスバルを連れてきてしまった。

それがフォルカの罪悪感であったのだ。

「それは違うぞ、フォルカ」

フォルカの言葉に青年は異を唱える。

「あの時お前が助けに入らなければもし誰かが助けに来たとしても僅差でスバルは下敷きになっていた。それに、この道はスバル自らが選んだ道だ。俺達にとにかく言う権利はない」

「しかし・・・俺は」

青年の言葉を聞きながらも未だにフォルカは納得できないのか答え

を洩る。

それを見ていた青年は呆れたかのように溜息をつく。

「それならば、スバルが生きて戻ってきたらお前の弟子として向かえればよいではないか」

「俺の？」

フォルカが驚いた顔をして青年を見て尋ねた。

それに青年は頷く。

修羅世界にはもう一つの掟がある。

それは師弟の関係である。

一度師弟の関係を結んだ者達はそのまま義兄弟となる。

修羅世界での師弟は全てを共に過ごすのだ。

それも寝食共にである。

それはまだ力の無い弟子を師匠が守る為である。

修羅の中には幼いながらもかなりの覇気を持った者も居る。

その者を狙って別の修羅や修羅獣が食らいに来たり攫いに來る事があるのだ。

だが、まだ力の無い若者ではそれを跳ね除けられる筈がない。

故にそれを師匠が守るのだ。

親が子を守るかのように師匠は弟子が巣立ち出来る様になるその日まで片時も離れず見守るのだ。

「俺に・・・その資格があるでしょうか？」

「それは分らん。だが、お前はスバルを弟子にする義務がある。

他の者ではたちどころにスバルを殺してしまう。お前しかスバルを守れる者は居ないんだ」

自信の無いフォルカに青年は語る。

それを言われたフォルカは拳を目の前に持って来てそれを硬く握り

締めた。

決意の表れである。

そしてフォルカは立ち上がる。

フラフラとしていたが、だがしっかりと二本の足で大地を踏み締め
て立ったのだ。

「アルティス義兄さん。俺はなる！あいつの・・・スバルの師匠に
俺はなる」

「それで良い。それでこそ私の弟だ」

決意し立ち上がったフォルカを見て青年アルティスは笑みを浮かべな
がらフォルカの肩を叩く。

この二人もまた師弟の契りを結んだ中である。

つまりフォルカにとってアルティスは兄同然の存在なのだ。

「さて、まずは顔を整えて来い。師匠がそんな仏頂面では格好が立
たんぞ」

「はい、分かりました」

フォルカは頷きそのまま脱兎の如く飛翔して去っていく。

すっかり元気になった姿のフォルカを見てアルティスは満足気に頷
いていた。

それとは入れ違いで別の青年がアルティスの元を訪れる。

蒼い髪をその瞳からは殺気が強く感じられる危険な雰囲気を持っ
た青年である。

「アルティス義兄さん。さっきフォルカに会いました」

「うむ、奴もついに決心したのだ」

もう一人の青年の前でアルティスは頷く。

それを聞いたもう一人の青年フェルナンドはフツと静かに笑みを浮かべた。

「それは良かった。あのままのフォルカなど倒す価値もないからな」
「共に技を磨きあったライバルであるが故の心配・・・か」

アルティスの呟きにフェルナンドは頷く。

その通りだからだ。

別に否定する要素は何処にもない。

「しかしあのフォルカが師匠に？ あんな甘い奴が本当になれるんですか？」

「確かに修羅としては失格だ。だが腕前は貴様も分かるだろう。師匠には十分向いている」

アルティスが太鼓判を押す。

それにフェルナンドは首を傾げる。

どうやら彼はまだ認めていないようである。

「俺にはアイツが師匠の器には向かないと思うんだがなあ」

「ならばお前がなるか？」

アルティスがフェルナンドの顔を覗き込みながら尋ねる。

それにフェルナンドは首を横に振る。

「遠慮しておきます。俺はまだ弟子を持つ気はない」

フェルナンドはそう言いまた彼も脱兎の如く飛び去っていく。

話を終えた以上此処に長居する必要はないからである。

やがてアルティス一人になる。

すると振り返り死の森を一瞥する。

（修羅達が最初に通る試練の一つ、死の森。この森で修羅の素質を確かめることが出来る。修羅に必要なのは生きる事への執念と闘争本能。その二つをこの森で養う事が出来る。だが、この森に入って生きて出てきた者達は100人中多くても10人・・・果たしてその中にスバルは含まれているだろうか？）

腕を組み難しい顔をしながらアルティスは森を見据えた。

そして、遂に約束の1年が過ぎ去ろうとしていた。

森の切れた平原の上には修羅王とその側近である將軍のミザル。

そしてフォルカ、フェルナンド、アルティスの三名が立っていた。

森の中から続々と若人達が出てくる。

皆殺気と闘争心に満ちた目をしている。

今にも襲い掛かりそうな目である。

「ほおう、今年は数が多いな。これで我等の手駒が増えると言う物よ」

今年の成果を見てミザルが満足気に語る。

目の前には既に20名以上の若人達が集まっていた。

これは正しく異例である。

毎年森から出てくるのは10名位なのだ。

それが今は20名以上は集まっている。

それがミザルには嬉しいのだろう。

だが、フォルカの顔は暗かった。

その20名の若者達の中にスバルが含まれて居ないからだ。

全てを見回したがスバルの姿は何処にも見当たらない。

フォルカはすっかり暗くなり俯いてしまった。

「どうやらこれで全てのようなですね」

「うむ、今からよりうぬら若人を修羅と認める。これより修羅の道を歩み共に阿修羅地獄を突き進もうではないか！」

天に拳を突き上げて修羅王が強く語る。

それを聞いた若人達が一斉に雄たけびを上げる。

生きて出られた事の喜びを体全体で表したのだ。

それを見て修羅王の顔に笑みが浮ぶ。

アルテイスとフェルナンドも同様である。

ミザルに至っては今にも笑い転げそうな勢いなのだ。

だが、フォルカは未だに暗いままである。

やがて、若人達を連れて引き上げようとした正にその時であった。

突如森にざわめきが響いた。

かと思うと突如として森から何かが飛び出して来た。

それは一直線に修羅王目掛けて飛び込んできた。

「む！」

修羅王は片手でそれを掴んだ。

それは木で作られた槍である。

そしてそれを握っているのは殺気と狂気に満ちた目をしたスバルであった。

「スバル！」

「おのれ小娘！ガキの分際で我等が王に手を上げるとは無礼な奴！即刻処刑してやる」

ミザルが怒り狂い修羅の兵士達を呼ぼうとする。
だが、それを修羅王が止める。

「よい、余興だ」

笑みを浮かべながら修羅王はパッと手を離す。

そのままスバルは地面に降り立つと槍の切っ先を修羅王の喉下に向ける。

その目からは殺気と狂気、そして怒りが見えていた。

「憎いか？この我が・・・うぬを死の森に追いやった我が憎いか？」
「ううう・・・うあああああああああ！」

雄たけびを上げながらスバルは得物を振るう。

だが、それを修羅王の手刀が迎え撃った。

乾いた音が響き、宙を弧を描くように何かが舞っている。

それは木の槍であった。

半分以上が手刀により切り取られ宙に舞ったのだ。

スバルの手元にあるのは最早使い物にならない木の得物である。

「ならば己が拳で挑め！我を倒してみせよ！」

修羅王が拳を突き立ててスバルに言う。

スバルは言われるがままに使い物にならない得物を放り捨てて拳を握り締める。

構えは滅茶苦茶で生き抜く為に身につけた我流とも見える。

いや、これは我流と言うのもおこがましい物であった。

「うおおおおおおおおあああああああ！」

再び雄たけびを上げてスバルが飛びかかる。

拳が、蹴りが、修羅王に向けて放たれる。

だが、それを修羅王が涼しい顔でかわし、いなし、捌く。

スバルの一撃は修羅王に掠りもしないのだ。
まるで子供と大人の喧嘩・・・嫌、それよりも酷い状況であった。

「くっ、うおおおおおおお！」

意を決し距離を一旦置いて其処から一気に飛びかかる。
だが、それを迎え入れたのは修羅王の拳であった。

「温いわ！」

一喝する一言が修羅王の口から放たれる。

それと同時にスバルの腹部には修羅王の拳が突き刺さる。
衝撃のあまりスバルの体がくの字に曲がる。

口からは鮮血が数滴吐き出されて更に悲痛の声上がる。
腹を抑える様な形ではあるがそれでもスバルは修羅王の前に立ち彼
を睨んでいた。

「その気迫やよし、だが攻撃とはこうするのだ！」

修羅王が更に一喝し今度は怒涛の如く修羅王の攻撃が放たれた。
スバルの目には修羅王の拳が流れる滝の雫の一粒一粒の如き勢いで
放たれてるように見えたのだ。

実際には修羅王が常人離れた速さで突きを放っているだけである。
しかしそれがスバルには修羅王は阿修羅神の如く腕が何本もあるか
の様な錯覚に見舞われた。

しかし彼女の思考は其処で途切れた。

修羅王の攻撃を全身で受けてやがて大地に倒れてしまったのだ。
全身くまなく突きを食らいボロボロになったスバルは仰向けに倒れ
る。

呼吸は荒く最早立ち上がる気力すらない。

「これまでだな。修羅王に刃を突き立てたこの娘は直ちに処刑だ！このワシ自らが葬ってくれるわ！」

ミザルが修羅王に代わり前に進み出て両手に覇気を纏う。だが、そんなスバルを庇うかの様にフォルカがミザルの前に立ちそして片膝をついた。

「ミザル將軍。お願いがございます！どうかこの娘を・・・スバルを私の弟子にさせて下さい」

「ならん！修羅世界に置いて修羅王は神に等しい存在！その修羅王に刃を向ける事は神を冒瀆するに等しい愚行！死すら生温い罪だ！」

フォルカの願いを一蹴しミザルが再び両手に覇気を纏う。

しかし、それでもフォルカは退こうとはしない。

そんなフォルカにミザルは苛立ちを感じた。

「退けい！退かねば貴様も同罪！共に死罪を与えるぞ！」

「この身を悪鬼羅刹の道に捧げてから既に覚悟は出来ております。死など恐れません」

「良くぞ言った。ならば小娘共々地獄へ行くが良い！」

ミザルが叫びフォルカに覇気の纏った手を振り翳す。

だが、その手を修羅王が掴み止める。

それに驚いたミザルが修羅王の顔を見る。

「良い、余興と言った筈だ」

「しゅ、修羅王様がそう言うのでしたら・・・命拾いしたな、フォルカ！」

未だに修羅王の言い分に納得しないのかミザルは不満な表情のまま下がる。

それに代わり今度は修羅王がフォルカの前に立つ。

「フォルカよ。うぬは今日よりその娘の師匠となりうぬの全てをその娘に注ぎ込むのだ！」

「は！このフォルカ・アルバーグ！必ずやスバルを最強の修羅にしてみせます！」

修羅王の裁きにフォルカは感謝し両手を重ねて感謝の意思を示した。そして立ち上がり倒れて動かないスバルをそっと抱き上げた。

「スバル、これが俺の罪滅ぼしになるかは分からない。だが、俺の全てを・・・お前に捧げる。お前が最強の修羅になるその日まで、俺はお前お守り抜いて見せる！」

意識のないスバルに向かいフォルカはそう告げた。

今日この日、スバルとフォルカは師弟の、そして義兄妹の契りを交わしたのである。

だが、スバルの試練はまだまだ始まったばかりである。

それを今この時のスバルが認識しているかどうかは・・・誰も知らない事であった。

地獄の終り・・・そして始まり（後書き）

次回からスバルの修羅への戦いの日々が始まります
では

出会い（前書き）

今回でスバルは運命の出会いをします

出会い

スバルがフォルカの元に正式に弟子入りしてから実に1週間が経っていた。

その間、スバルはフォルカの指導の元厳しい修練に励んでいた。

「よし、スバル！打ち込んで来い！」

「はい！てえええやああ！」

雄たけびを上げてスバルはフォルカに飛び掛ってきた。

そして猛烈な勢いで蹴りを放つ。

だが、その蹴りをフォルカはあっさりと片手で受け止める。

「温い！」

そしてその一言を放ちスバルの腹に一撃を放ち吹き飛ばす。

吹き飛ばされたスバルは地面に激突し腹を抑えながらも立ち上がる。

「ま、まだまだあ！」

「よおし、来い！」

気合十分のスバルを見てフォルカが叫ぶ。

それから二人の激しい乱取りが行われた。

時間的に数十分経った後・・・其処には腕を組んで立っているフォルカとは対照的に大の字になって倒れているスバルが居た。

「ま・・・まだ・・・まだあ・・・」

「今日は此処まで・・・無理をして体を壊しては元も子もないだろう」

「し・・・しかし」

倒れながらもまだ戦おうとするスバル。

だが体は正直らしく全く動こうとしない。

そんなスバルに向かいフォルカがそつと手を差し出す。

「今日はゆっくり休んで、明日また修練すれば良いだけの事だ」
「・・・はい」

諦めたのかスバルはフォルカの手を取り立ち上がる。

立ち上がったスバルを見てフォルカはやわしく微笑む。

「よし、今日は汗を流して腹ごしらえして寝るぞ」
「はい！」

フォルカの言葉にスバルは元氣良く答える。

以前とは打って変わって殺気のそれは消えていた。

そして、今はフォルカを師匠として、そして義兄としてフォルカに
教えを乞う事となっていたのだ。

そうなってから実に1週間は経っていた。

「・・・」

フォルカは歩きながら黙って自身の腕を見た。

其処には多数の痣が出来ていた。

スバルとの修練の末に出来た傷である。

（たった1週間だと言うのに此処までの傷を付けられるとは・・・
スバルの成長振りには驚かされるな）

正直言ってフォルカ自身も驚いていた。

たった1週間程度でとは言えスバルの實力はメキメキ上がっていた。しかし一人前にはまだまだ程遠い位でもある。

それだとしても此処まで成長したのはフォルカにとっては喜ばしい事であったのと同時に悲しい事でもあった。

本来ならスバルは普通の少女として生きられる筈だったのだ。

それをフォルカが彼女の人生を狂わせてしまったのだ。

故にフォルカは彼女を命がけで守る事を決めたのだ。

その方法はこうして彼女を自身の弟子にする事だけであった。

修羅達の利用する大浴場。

大浴場と言うだけあり大きさも外装もなかなかの物であった。

現在は時刻的に利用する者達が居ない為か中に居るのはフォルカとスバルだけである。

「っっ!!!」

「傷が痛むか？」

修練の末についた傷を抑えるスバルを見てフォルカが尋ねる。

「は、はい・・・ですがすぐに治まると思います」

「そうだな。その痛みはやがてお前の血肉となるだろう」

フォルカは優しくそう言う。

それにスバルが笑みを浮かべて頷く。

読者の皆様は疑問に思うだろう。

何故女のスバルが男湯に居るのか？

それは修羅の世界の常識が故である。

修羅の世界において師弟関係とは家族の関係のそれと匹敵する物なのだ。

即ち弟子にとって師匠は本当の父に等しい存在になる。

と、言うのも若い修羅には無限の可能性が秘められている。

それ故に若い内に狙われる危険性が高いのだ。

別の修羅に力を奪われるか、もしくは危険な修羅獣の餌食となるか。

どちらにしても修羅になったからといって安心は出来ないのだ。

だからこそ師匠は命がけて弟子を守り、そして技を伝えるのだ。

故に師匠と弟子は衣食住全てを共にする義務がある。

無論風呂や寝食を共にする事など当たり前である。

だが、だからと言って安心してはいられない。

もし、弟子に見込みがないと師匠が判断したらその場で切り捨てられる場合もあるのだ。

故に弟子は命がけて師匠から技を盗み自分の物にしなければならぬのだ。

言うなればフォルカの様な師匠は珍しいと言える。

「義兄さん、背中を流します」

「ああ、頼む」

互いに浴槽から上がり、フォルカはスバルに背中を流してもらう。スバルには鍛え上げられゴツゴツした手触りのするフォルカの背中が何よりも頼もしく見えた。

ふと、スバルはフォルカの背中に手を置く。

「どうした？」

「大きい、凄い大きいなあ・・・と思ひまして」

「そうか、さて、早く上がるとしよう。腹が減っただろう。今日はお前の好物のオオトカゲの丸焼きだ」

「本当ですか!？」

フォルカのそれを聞いた途端スバルの目が輝く。

余程好物らしい。

風呂場から上がり、スバルとフォルカを出迎えたのはアルティスとフェルナンドの二人であった。

「アルティス義兄さん!フェルナンド義兄さん!」

「遅かったな。待ちくたびれたぞ」

「さて、全員揃った事だ。頂くとしよう」

席についた四人は皆手を合わせて食事に入る。

机の上には体長役4mはあるであろう大きなトカゲが丸焼きになって置かれていた。

修羅の世界において食事は常に自給自足なのだ。

食材は自身の手で取ってくる。

これは当たり前の事である。

故に修羅の世界では強くなくては生きられないのだ。

そして、今回の食事はスバルの大好きなトカゲの丸焼きであった。

こんがりと皮面には焼き色がついており、皮を捲ると油の乗った肉が音を立てて肉汁を垂らして出迎えてきた。

思わず生唾が飛び出す。

これの食し方は至ってシンプルである。

腕を食べたい場合は腕を千切りその皮ごと肉を頬張れば良い。

足も同様である。

皮は生だと硬くて食えないのだが焼けば魚の皮の様にパリパリした食感になりそれが中の肉と非常に良く合うのだ。

しかし何と言っても一番美味しいのは腹の肉である。

筋肉と脂肪の絶妙なバランスにより生み出される旨味は極上である。その為、腹の肉は常に奪い合いになる。

「フォルカ！その肉は俺のだ！勝手に取るな！」

「嫌、幾ら貴様の言い分だとしてもこれは譲れない！」

「いいえ、私も同じです！これは私のです！」

「三人とも、少しは落ち着いて食事をしたらどうだ？」

肉をがつく三人とは打って変わって、アルティスはとても上品に食べている。

皿に切り分けた肉を置きそれをナイフとフォークを使い一口サイズに切って口の中に放り込んでいく。

弟や妹達の手前上そうしている様にも見えるが単にそうして食べるのが習慣づいているだけであろう。

何はともあれ騒がしくもにぎやかな食事を終え、フォルカとスバルは共に寢床についた。

「スバル、明日も修練をやるぞ。しっかりついて来いよ」

「はい、義兄さん」

フォルカの言葉にスバルは強く頷く。

そうして二人は静かに眠りにつくのであった。

翌朝、何時もの訓練場に今はスバル一人で来ていた。
一人で素振りをしている。

「はあ！せい！」

掛け声を上げながら拳や蹴りを放つ。
現在此処にはスバル一人しかない。
何時も訓練場に最初にスバルはやってきてこうして体を温めておくのだ。

そうしてフォルカがやってきた際に組み手が行われると言う仕組みなのである。

しかし、これには盲点があった。

それは、組み手の準備をしている間フォルカとスバルは離れ離れになっている事である。

その為・・・

「あれがそうか？」

「ああ、あれがフォルカ様のお墨付きの修羅だ」

素振り中のスバルを遠めから眺める数人の修羅達が居た。
皆不気味な顔をしている。

その笑みの中には殺気が感じ取れた。

「どうする？やるか」

「当たり前だ！あんな奴があのかフォルカ様のお弟子になるとはおこ

がましい・・・この場でくびり殺してやる」

そう言い会々と修羅達が動き出した。

何故スバルの命を狙うのか。

それは即ちスバルを殺し自分がフォルカの弟子になる為である。

修羅の世界において強い修羅の弟子になる方法は二つある。

一つはその修羅の可能性を師匠が見出し弟子にする事。

もう一つはその弟子を殺し自分が弟子になる事である。

修羅の世界において情けは無用の長物。

力無き者には死しか与えられない。

生き残る為には強くなるしかない。

誰よりも。

そして、この修羅達も生きる為にこうしてスバルを襲う事にしたのだ。

「行くぞ！」

修羅達のリーダー格が合図を送り、一斉にスバルの前に現れた。

「あ、貴方達は？」

「お前には関係ない。何故なら・・・お前は今から俺達に殺されるんだからなあ！」

「な！どうしてそんな事を？」

「問答無用！ぶっ殺せ！」

『おう！』

リーダー格の修羅が叫び、それと同時に三人の修羅達が襲い掛かってきた。

「くっ！」

スバルは咄嗟に構える。

だが、それよりも早く修羅達が攻撃を仕掛けてきた。

「ハハハッ！所詮はヒョッコだなあ！そんな悠長に構えていたら殺して下さいと言っているようなもんだぞ！」

修羅達が笑いながら攻撃を仕掛けてくる。

それに対しスバルは防戦一方であった。

いかに死の森で闘気を鍛えたスバルとはいえ、まだ本当の戦いの経験の無いスバルには厳しい物であった。

「ぐうつ！」

修羅の一撃が急所に当たり体勢を崩す。

其処へ畳み掛ける様に修羅達が攻撃を仕掛けてきた。

拳が、蹴りが、無数の突きがスバルに向かい襲い掛かってきた。

四方からスバルを取り囲んで殴る蹴るの暴行を行う修羅達。

暫くしたら修羅達の目の前にはボロボロになり仰向けになって倒れるスバルの姿があった。

全身に酷い傷が出来最早立ち上がる事も出来ない状態であった。

そんなスバルを修羅達が見下ろす。

そのどれもが下卑た笑みを浮かべている。

「さて、こいつを殺した後誰がフォルカ様の弟子になるか・・・」

「それもまた殺し合いで決めれば良い事だろう。何よりもまずはこいつにトドメを刺すのが先だろう」

「それもそうだな」

修羅達が動けないスバルを見て両手に覇気を集める。

そしてその纏った覇気での一撃を放とうとした時であった。
その覇気の一撃を別の覇気が遮った。

「何だ!？」

「やれやれ、女一人に男が四人がかりでやるたあ・・・それじゃ修羅の風上にも置けねえなあ」

「て、てめえは!」

修羅達が見た場所、それは先ほどまでその修羅達が居た場所であった。

其処には一人の修羅が立っていた。

青い長い髪を後ろで束ねて斜めに構えた顔つきをした修羅た其処に居た。

「てめえ! トウマ!!!」

「よお、お楽しみの所邪魔して悪かったな」

笑いながらトウマは修羅達の前に立つ。

そしてボキボキと腕を鳴らす。

「てめえ! まさかてめえもフォルカ様の弟子になるつもりなのか?」

「まさか? そんなつもりはさらさらねえよ。只・・・黙って見ていられなくてよお」

チラリと倒れているスバルを見る。

「男としちゃあこんな酷い事されてるのを黙って見過ごすなんぞ出来ないんでねえ」

「けっ! 正義の味方気取りかよ! 虫唾が走るぜ!」

「構うこたあねえ! こいつを先にぶっ殺せ!」

修羅達が殺気を放ちトウマに迫る。

だが、その修羅達の攻撃を悉くトウマはかわしていく。

「ほらほらどうしたあ？ そんな蠅が止まるような突きじゃあ俺に当たるにやあ100年掛かるぜえ」

「ち、畜生！」

修羅達が怒り更に攻撃の速度を上げる。

しかし、それでもトウマにはかすりもしない。

「馬鹿だなあ・・・攻撃ってなあ、こうするんだよ」

途端にドスの利いた声になった途端トウマの手刀が目の前に居た一人の修羅の片腕をへし折る。

グニヤリとありえない方向に腕が曲がる。

「ぐわあ！ 腕が・・・俺の腕があ」

「野郎！」

他の修羅達がトウマに蹴りを放つ。

「とろいっつってんだよ！」

だが、それにカウンター宜しくトウマが蹴りを放つ。
互いの蹴りがぶつかりあう。

結果は修羅の足が切断されるという結果であった。

蹴りだけで修羅の足を引き裂いたのだ。

「ぎゃあ！」

「その程度の実力じゃあ弟子になった所でせいぜい3日が限度だな」
「舐めるんじゃない！」

最後にリーダー格が両手に覇気を込める。

そして覇気を込めた一撃でトウマに殴りかかってきた。

覇気を込めた一撃はそのままトウマに直撃する。

しかしトウマには蚊が刺す程度にしか効いていない様な顔をしていた。

「温いな。そんな薄汚れた覇気じゃ俺は殺せないぜ」

「う、薄汚れた・・・だとお！」

「教えてやるよ。これが俺の覇気だあ！」

トウマが深く息を吸い、そして体中から覇気を放つ。

その覇気の量は実にそのリーダー格の数倍は軽く上を行っていた。

「ひ、ひいいい！」

「今更命乞い・・・って話はないよなあ？」

「た、頼む！助けてくれ！い、命だけはあ！」

「へっ、しょうがねえなあ・・・その代わり」

トウマがニヤリと微笑む。

そして覇気を纏った手を手刀状にしてリーダー格の頭に向けて何度も突き付けた。

その間、終始リーダー格は動けなかった。

そのしぐさはほんの一瞬で終わった。

気がつくのとトウマの手は元の位置に戻っていた。

「へっ？ど、どうなってんだ？」

「これにこりたら二度とこいつに近づくんじゃないぞ。残った髪が

大事ならな」

「へ？」

リーダー格の男はトウマの言葉が気になり懷から鏡を取り出して自分の頭を見る。

すると其処にはスキンヘッドの上に一本だけ天辺に残った髪がゆらゆらしている光景があった。

「な、なんじゃこりやああ！」

「ほれ、そいつの足だって今なら間に合うぜ」

その場に落ちていた足をリーダー格に向けて投げ放つ。
リーダー格の修羅はそれを黙って受け取った。

「ち、畜生・・・覚えてろよ！この借りは何時か必ず返してやるからなあ！」

「へっ、やあだようだ！」

去っていく修羅達に向かいアツカンベーするトウマ。
そしてクルリと振り返る。

其処にはどうにか上半身だけ起き上がるスバルが居た。

「ひでえ事しやがるなあ。痛むか？」

「何故・・・助けたんですか？」

「ま、只の気まぐれって奴か？それより・・・使うか？」

トウマがそう言って懷から傷薬を取り出す。
だが、スバルはそれをおうとしなかった。
トウマを警戒しているのだ。

「遠慮するなよ。別に下心はねえよ」

「・・・すみません」

どの道今のスバルでは抵抗したところで今のトウマに一撃の下に殺されるだろう。

観念したスバルはトウマに治療を任せる事にした。

トウマは慣れた手つきで傷口に傷薬を塗る。

修羅世界は戦いが主な世界なだけに治療器具などは発展している。

大抵の傷なら塗り薬程度ですぐに直してしまえるのだ。

「貴方は珍しい人ですね。大抵の人なら私を殺すと言うのに」

「何だ？俺ってそんなに変か？」

「変です」

「正直だなあおい」

トウマが苦笑いを浮かべる。

それを見たスバルがふと、笑みを浮かべた。

「ほおう、お前の笑った顔・・・結構可愛いじゃねえか」

「か、からかってるのですか？」

「好きにとりな・・・よし、終わったぞ」

手を叩き治療の完了を表す。

治療を終えたスバルはゆっくりとだが立ち上がる。

「あ、有難う御座います」

「なあに、良いって事よ。困ったときはお互い様って奴さ。例え修羅でもなあ」

礼を言うスバルにトウマは爽やかなな笑みを浮かべる。

「そう言えばまだ名前を名乗ってなかったな。俺はトウマ。トウマ・アズマって言う」

「名前は分かりません。只、義兄さん達は私の事をスバルと呼びます」

「スバルか・・・良い名だな」

「貴方こそ」

トウマとスバルは互いに笑いあった。

これこそが、後に悲しき運命をたどるであろうスバルとトウマの初めての出会いであった。

その二人を壁の向こうでフォルカは見ていた。

本当ならフォルカはすぐにでもスバルを助けに行きたかったのだ。

だが、無益な情けは彼女をより過酷な地獄へと落としてしまう。

それに、師匠が弟子同士の小競り合いに手を出した場合その弟子は一人では生きてはいけぬと判断され掟にそって処罰されるのだ。

弟子同士の小競り合いは弟子自らが解決しなければならぬのだ。

辛い世界である。

しかし、それこそが修羅の世界なのだ。

出会い（後書き）

多少本編とは違うかも知れませんがこれこそがトウマとの初の出会いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4994u/>

龍魂 黒炎の龍と獄炎の獅子

2011年11月13日14時22分発行